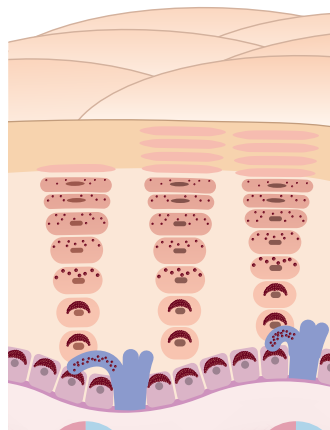


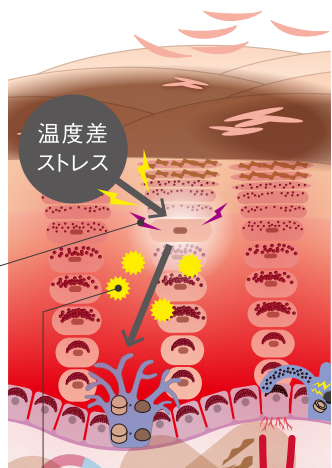
温度差ストレス

温度差ストレスは、「肌色」と「肌質」の両方へのダメージを引き起こしていた。

理想の肌



温度差ストレスが生じている肌



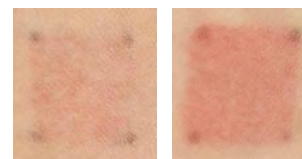
KITLG発現増加
(メラノサイト刺激因子の遺伝子)
IL-6発現増加 (炎症性物質の遺伝子)

「肌色」へ影響。日焼けしやすくなっていた。

メラニン量の増加

温度差ストレスにより
メラニン量は増え、
メラニン排出は停滞

温度差ストレスによる日焼けのしやすさを比較



(ポーラ化成工業 研究所 調べ)
※画像は代表例です

温度差付加がある状態とない状態を肌に生じさせ、その後それぞれに同量のUVを照射し、24時間後の紅斑を撮影。

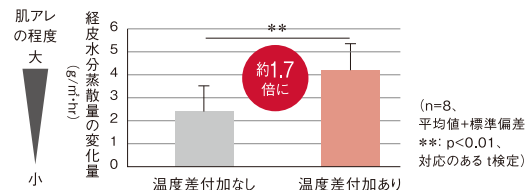
「温度差付加あり」の条件：
皮フ温度よりも約5℃以上
高い温度付加をした状態

「肌質」へ影響。肌アレしやすくなっていた。

炎症性物質の増加

温度差ストレスにより
肌アレを引き起こす
炎症性物質の
遺伝子発現が増加

温度差ストレスによる肌アレのしやすさ



温度差付加がある状態とない状態を肌に生じさせ、その後それぞれに同量のUVを照射し、試験開始前およびUV照射72時間後の経皮水分蒸散量を測定し、その変化量を比較した。「温度差付加あり」の条件：皮フ温度よりも約5℃以上高い温度付加をした状態。温度差ストレスにより経皮水分蒸散量が増え、その結果、バリア機能が低下し肌アレしやすくなっていることが示唆。